

ノーベル賞の社会的意味 検証

今年のノーベル文学賞は、10月6日に発表される。世界の文学研究では、この賞を歴史や社会、世界的な政治状況と絡めて検証する動きが模索されているという。賞に関する国際シンポジウムに参加した井上隆史・白百合女子大教授に寄稿してもらった。



いのうえ・たかし 1963年生まれ。白百合女子大教授（日本近代文学）。『決定版 三島由紀夫全集』の編集に携わる。『暴流の人 三島由紀夫』で読売文学賞。

寄稿
井上隆史
* 白百合女子大教授

ノーベル賞は世界で最も権威ある文学賞である。しかし、時代や社会の中での役割が正面から問われたことはこれまでなかった。その実態に迫る国際シンポジウムが、8月24日から3日間にわたりドイツで開かれ、研究の最前線となる議論が交わされた。

会場は詩人シラーの生地マルバッハにあるドイツ文学資料館。ハイプロー（知的で趣味が良く高級）な作品を選別する制度としてのノーベル賞の機能や、受賞前後の書籍販売数の増減を、データに基づいて図表化するような社会的アプローチが目立ったが、歴代受賞者の中に認められる政治的、歴史的な対比構造に触れる発表も多かった。具体的には、「NATO（北大西洋条約機構）と同調する作家」対「NATOのユーゴ空爆を批判したペーター・ハントケ」、「母国のナシヨナリズムと同調する作

家」対「オスマン帝国時代のアルメニア人虐殺を認めたとして国家侮辱罪に問われたトルコのオルハン・パムク」といった対比で、私たちの発表もこの延長上に位置づけられるかもしれない。私たちが言ったが、今回私は、香港メトロポリタン大学のマイケ

冷戦や文革、西洋-非西洋

ル・カチー・チャーク氏と共同で、「ノーベル・コンプレックス」（作家個人ではなく作家の属する共同体が賞に対して抱く憧憬と反感の複合体を示す私たちの造語）という観点から、川端康成、大江健三郎、高行健、莫言という4人のケースを取り上げた。川端の受賞（1968年）は、敗戦で傷ついた日本の文化的自尊心の回復に寄与したが、選考過程に影響を与えた米国の日本文学研究者サイデンステッカーの英訳『雪国』を見ると、西洋の読者に過度に猥褻な印象を与える恐れのある箇所が省略されており、川端＝受賞にふさわしい繊細な美の表現者、というイメージが形成されてゆく経緯の一端を窺うことができる。

その背景には、冷戦下にあった当時、共産圏に対する優位を示すために西側諸国の作家の受賞を望んだCIA（米中央情報局）の文化戦略もあった。中国では、文化大革命後の開放政策の一環としてノーベル賞獲得のためのロビー活動が行われたが、実際に受賞したのは天安門事件で政府を批判してフランスに亡命した高行健だった（2000年）。中国政府はこれに反発し、後に莫言を中国最初の受賞者として祝福したのだが（2012年）、近年ではその莫言も社会の暗部ばかりを描いているとして中国国内で非難されている。

ここには冷戦の圧力や西洋-非西洋の間の文化的軋轢など複雑な要素が絡み合っている。しかしそれでもなお私たちは、ノーベル賞の可能性に賭けたいと思った。たとえば、大江は受賞講演（1994年）において西洋的ヒューマニズムを称賛したが、15年後に発表した小説『水死』では、むしろその限界を、独自に解釈された天皇制ナシヨナリズムによって乗り越えようとしている。これは、受賞がもたらした最良の果実の一つだと言えないだろうか。やや挑発的であることを危惧しつつ私はこう述べたが、この問題提起は参加者の心に届いたと思う。ノーベル賞もそれを取り巻く現実も、地政学的危機を伴う深刻な問題を抱えている。だからこそ議論を重ねなければならぬと、皆、痛切に感じているのである。

（上から時計回りに）ノーベル文学賞が決まり乾杯をする作家の川端康成、高行健さん、莫言さん